

氏名・(本籍)	津 ^{つがる} 軽 ^や 谷 ^{めぐみ} 恵 (秋田県)
専攻分野の名称	博士 (保健学)
学位記番号	医博甲第10号
学位授与の日付	平成26年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科専攻	医学系研究科 (保健学専攻)
学位論文題名	秋田県における都市部ケアハウス居住高齢者と農村地域在住高齢者の生活時間構造と心身機能および社会生活機能 —高齢者のニーズ把握と生活支援のための多面的評価を用いて—
論文審査委員	(主査) 教授 石川 隆 志 (副査) 教授 湯 浅 孝 男 教授 新 山 喜 嗣

論文内容の要旨

研究目的

本研究では、地域包括ケアシステムにおいて予防的あるいは治療的視点に関わるリハビリテーションの役割を果たすため、生活に影響する生活時間構造や心身機能・社会生活機能の多面的な評価を実施し、その有用性について検討する。地域包括ケアシステムでは、さまざまな居住形態や環境・地域における高齢者の支援が想定されるが、今回は、その第一段階として比較的便利な生活環境にあるケアハウス居住高齢者と過疎化が進行した農村地域の在宅高齢者を対象に多面的な評価を実施し、ケアハウス居住高齢者と在宅高齢者の生活時間構造と心身機能・社会生活機能を比較検討する。また、健康で自立した生活に必要と考えられる、運動習慣や趣味活動、外出、対人交流の頻度との関連についても検討する。

対象・方法

1. 対象

ケアハウス居住高齢者：A 県 B 市の C ケアハウス入居者54名（男性20名，女性34名，平均年齢83 ± 7 歳）。農村地域の在宅高齢者：A 県 D 町の在宅高齢者21名（男性6名，女性15名，平均年齢68 ± 5 歳）。なお，両地域の対象者に対して，研究の目的・方法および協力と撤回の自由について説明し書面にて同意を得た。

2. 方法

両地域の対象者全員に、身体機能測定、精神機能評価、知的機能評価、社会生活機能評価、QOL評価（SF-36）、生活スタイルの調査を実施した。身体機能測定以外は、面接にて調査した。測定の順番としては、まず初めに身体機能の測定を実施してから生活時間や精神機能等の評価を実施した。

結 果

1. ケアハウス群（ケア群）と在宅群ごとの各調査項目と生活時間の関連性について

ケア群の日常生活時間と関連が認められた項目は、FSSTで正の相関、SF-36（VT）・遊び余暇活動時間で負の相関であった。仕事生産的活動時間と関連が認められた項目は、FSSTで負の相関、IADLで正の相関であった。遊び余暇活動時間と関連が認められた項目は、SF-36（BP）で正の相関であった。在宅群の日常生活活動時間と関連が認められた項目は、生活リズム質問票・身体的同調度・光照射生活満足に関する同調度・仕事生産的活動時間でいずれも負の相関であった。仕事生産的活動時間と関連が認められた項目は、RDST・遊び余暇活動時間で負の相関、生活リズム質問票・光照射生活満足に関する同調度で正の相関であった。遊び余暇活動時間と関連が認められた項目は、握力（右）のみで正の相関であった。生活時間に影響を与えている因子を抽出するため各生活時間を従属変数としてステップワイズ線形重回帰分析を行った結果、両群とも「日常生活活動時間」に採択された項目は「遊び余暇活動時間」であった。日常生活活動時間が長いほど、遊び余暇活動時間は短くなる。

2. 生活時間調査において聴取した一番重要と選択した下位活動について

各活動を重視している群の特徴を探るために、ケア群は日常生活活動重視群（日常重視群）と非重視群および遊び余暇活動重視群（遊び重視群）と非重視群の各調査項目の比較を行った。在宅群は、日常重視群、仕事生産的活動重視群（仕事重視群）、遊び重視群の3群の各調査項目の比較を行った。在宅群の比較では、「光照射・生活満足に関する同調」において、仕事重視群が有意に高かった。ケア群では、「睡眠の質同調度」において、日常重視群が有意に高かった。「SF-36（RP）」においては、日常重視群が有意に低かった。「会話・交際の時間」は、日常重視群が有意に長かった。「仕事生産的活動時間」において、遊び重視群が有意に短かった。「会話・交際の時間」においては、遊び重視群が有意に長かった。「SF-36（RP）」においては、遊び重視群が有意に高かった。

3. ケアハウス入居者と在宅高齢者の65歳以上の非要介護群における各調査項目の比較

FSSTでは、在宅群が有意に速く、社会的同調度では、有意に在宅群が高く、身体的同調度では、ケア群が有意に高く、ウルトラディアンリズム同調度では、ケア群が有意に高く、SF-36（GH）では、ケア群が有意に高く、日常生活活動時間では、ケア群が有意に長く、身の回りの時間では、ケア群が有意に長く、仕事生産的活動時間では、在宅群が有意に長く、遊び余暇活動時間では、ケア群が有意に長かった。

考 察

今回、2地域の高齢者を対象に、量的な心身機能や社会生活機能評価と質的な生活時間構造調査による評価を組み合わせ実施し、群間比較をしたことで、様々な側面から対象者の状態像を明確に把握することができた。特に24時間どのような生活をしているのかを生活時間構造により調査したことで、心身機能や社会生活機能の各要素が相互に関連しあい、生活時間構造に影響を及ぼしてることが明らかとなった。ケア群では身体機能は低下していても全体的健康感是在宅群より高値を示し、「趣味・娯楽・教養」の時間に多く従事していたり、在宅群では、身体的不調があったとしても外出して他者との交流を望んでいたりと、ある側面の評価だけではわかりえなかった部分が多面的に評価したことで明らかとなった。今回は、多面的な評価により2地域の高齢者の特徴をとらえることができたが、地域包括ケアシステムでは、個々の対象者の生活を住まいや生活支援、医療、介護、予防のサービス提供を行う多職種が情報交換と連携をしながら協働して支援していくことが重要である。地域で対象者とのかかわる場面では、作業療法士が一人で調査を実施することは不可能だが、それぞれの専門性を活かしながら多職種で協働して生活時間構造調査も含めた多面的評価を実施することが必要と考える。本研究の結果、対象者の多様なニーズを把握するための、生活時間構造と心身機能および社会生活機能、からなる多面的評価の有用性が示唆された。

結 論

本研究では、地域包括ケアシステムにおいて予防的あるいは治療的視点に関わるリハビリテーションの役割を果たすため、生活に影響する生活時間構造や心身機能・社会生活機能の多面的な評価を実施した。地域包括ケアシステムでは、さまざまな居住形態や環境・地域における高齢者の支援が想定されるが、今回は、その第一段階として比較的便利な生活環境にあるケアハウス居住高齢者と過疎化が進行した農村地域の在宅高齢者を対象に、ケアハウス居住高齢者と在宅高齢者の生活時間構造と心身機能・社会生活機能を比較検討した。健康両群の年齢差が身体機能結果に影響を及ぼしていたが、身体の不調に関しては在宅群がより感じており、生活リズムについても在宅群のほうが不規則であった。ケアハウスという環境により、近くにはたくさんの方がいるにもかかわらず関係性が希薄で、近所づきあいのある在宅高齢者に比べ、ソーシャルサポートや社会的同調度、老研式（社会的ADL）が有意に低値を示していた。QOLのSF-36（GH：全体的健康感）では、在宅群のほうが低く、表には見えてこない問題を抱えていることが考えられた。そのため、在宅高齢者への支援も早期から実施することが重要と考える。生活時間構造評価では、各活動への従事している時間を調査し、地域の異なる高齢者の各活動における従事時間の現状を知ることができたが、活動にどれぐらいの時間を費やしているのかを聴取するだけでなく、その活動を行っている理由や所要時間の原因、その活動を実施することに伴う環境や人間関係など様々な情報も得ることができると考えられた。さらに活動に対

する重要度も聴取することで対象者がどの活動に価値を置いているのかを理解して、生活の支援につなげていけるのではないかと考え、地域包括ケアシステムの中で地域在住高齢者の生活を支援していくための、生活時間構造と心身機能と社会生活機能、の調査からなる多面的な評価の有用性が示唆された。

引用文献

- 1) 樋口由美：Health promotion から見たリハビリテーションの未来とその可能性，理学療法（41），2012
- 2) 杉澤奈緒ほか：地域在住の健康な高齢者の生活時間と自覚的健康感の関係に関する予備的研究，作業行動研究14(3)，151-160，2010
- 3) 李相侖ほか：高齢者の社会活動および社会的ネットワークにおける地域差の検討：健康度自己評価との関連をふまえて，身体教育医学研究14，1-8，2013
- 4) 林拓男ほか：地域包括ケアにおける介護予防とリハビリテーションの役割，地域リハビリテーション8(10)，730-736，2013

論文審査結果の要旨

本論文は、地域在住高齢者への予防的・治療的介入が期待されるリハビリテーションの役割を果たすために、生活時間構造と心身機能および社会生活機能からなる多面的な評価の有用性について、秋田県内2地域の高齢者を対象に評価を実施しその結果について検討したものである。本研究の斬新さ、重要性、研究方法の正確性、文章の簡潔明瞭性は以下の通りである。

1) 斬新さ

高齢化率全国1位の秋田県において、ケアハウス群と在宅群の生活時間構造と心身機能および社会生活機能の評価結果の関連について詳細な分析を行い、生活時間構造評価と他の諸評価を合せた多面的評価の有用性を明らかにしたことは、他の高齢化地域のモデルともなり斬新さがある。

2) 重要性

多面的評価を実施することで、対象者個々のニーズに基づく介入のみならず、地域特性を踏まえた地域在住高齢者への効果的介入が可能になると考えられる。

3) 研究方法の正確性

本研究はその目的を達成するために、ケアハウス群および在宅群ごとの重回帰分析、各群内で重視する日常生活活動時間の下位活動による評価結果の比較、非要介護者の群間比較が、適切かつ正確に行われていた。倫理的配慮も適切であった。

4) 文章の簡潔明瞭性

本論文は、膨大な評価結果を研究の目的に即して解析し、結果と考察について簡潔明瞭に記載されている。以上より、本論文は博士の学位論文として十分価値あるものとして評価された。